

質問に答えて… レファレンスコーナー

調査・相談カウンターに寄せられた興味深いレファレンスの中から、郷土に関わる3件を選んで紹介します。

Q 南部藩の火消しについて知りたい

依頼を寄せられた方は、元禄時代の火消しに関する古文書を持っておられるのだそうです。南部藩の消防制度や組織ができた経緯について書いている資料をご紹介します。

1冊目は『いわて消防物語』。

江戸時代に火付け、強盗が横行した背景に、凶作・飢饉など社会全体に混乱をきたす災害があった事を説明しています。〈江戸消防と南部火消しの接点〉の項では、南部藩の消防が評判を得たきっかけとして、寛永15年(1638)江戸桶谷町の火事での活躍を挙げています。別項では、〈南部藩消防規則・心得・行列〉を紹介しています。

2冊目は『盛岡市史』。

ご城下としての盛岡は、最も住宅密度が高く消防設備を充実することが急務であったとして、延宝4年(1676)に武士街消防隊が作られました。その時の役職名と役人名、出火の際の職務分担なども記述されています。

3冊目は『盛岡藩雑書』。

『盛岡市史』がその典拠とするもので、南部家の藩庁日誌として藩政研究上必須の史料です。原本の解読を進めながら、昭和61年(1986)から今までに19巻が発行されており、例えば「盛岡歩行火廻任命」「火事ノ節 火消ノ面々」といった頭注もあるので、古文書が読めなくても手に取りやすい資料です。

これらの資料は館外貸出が可能です。依頼された方にも、最寄りの市町村立図書館を通して御覧頂くことができました。

【参考文献】 ()内は当館請求記号

- 『いわて消防物語』 岩手県消防協会 編 「いわて消防物語」刊行委員会 発行 1986年(K319/イ6/1)
『盛岡市史』近世期上 近世期上二 森嘉兵衛 監修 盛岡市 編 トリョー・コム 発行 1979年(K211/モ1/2-2)
『盛岡藩雑書』第三巻 盛岡市教育委員会 編 熊谷印刷発行部 発行1989年(K200.9/モ3/3)

Q 郡立稗貫農学校の県立移管の際、賢治が書いたとされる「陳情書」とは？

宮沢賢治が教諭を勤めた郡立稗貫農学校は、大正時代に県立花巻農学校へ移管し、修業年限二ヶ年の乙種から三ヶ年の甲種へと昇格しています。

調査を依頼された方のお話によると、ご自身が読んだ本の中に「賢治の母の弟・恒治が、稗貫農学校の移管、県立昇格に尽力し、賢治にはその趣意書の案文を書かしている」と書いてあるので、趣意書の全文を見たいと思って関係機関に尋ねたけれど、不明との回答であったそうです。

調査を始めたところ、堀尾青史 編『宮沢賢治年譜』の中にその記述は見つかりました。

しかし趣意書そのものは載っておらず、所在にも触れられてはいません。

他の資料を当たると、大正10年(1921)末の稗貫郡会(※)において、「県立移管を前提とする農学校の校舎新築及びその他の設備に要する予算案」が可決され、校舎適地の件で二派に分かれて誘致合戦が行われた事が分かりました。学校史には、敷地問題の経緯と、運動に奔走した宮沢恒治が翌年の8月知事に県立移管の陳情書を提出するまでの経緯について、詳しく書かれています。

「陳情書は、当時、農学校の教師をしていた甥の賢治に頼んで草稿してもらった。読んでみると、なかなか立派な出来ばえだったので、僅か二、三ヶ所を訂正しただけで清書し(中略)これを持って知事を訪問した」というのが恒治本人の談です。

しかし「この時の陳情書は、紛失して見当たらない」とも語っており、見ることは難しいと判断せざるを得ないものでした。

残念な結果でしたが、依頼された方に報告しご了承をいただきました。

※当時の郡は単なる地理的区分ではなく府県と町村の中間の地方公共団体。郡会はその議決機関。

【参考文献】 ()内は当館請求記号

- 『宮沢賢治年譜』 堀尾 青史 編 筑摩書房 発行 1991年(賢/ホ1/6)
『私の賢治散歩』上巻 菊池 忠二 著 2006年(ケン910.268/キク/1)
『花巻八十年史』 花巻農業高等学校 編 岩手県立花巻農業高等学校 発行 1985年(K376.42/ハ1/21)





龍泉洞、安家洞の洞窟のしくみ、動植物について。
ヒカリゴケについて、ヒカリゴケに詳しい研究家・機関等について知りたい。

県外の方から龍泉洞のしくみや動植物、ヒカリゴケについての調査依頼が寄せられました。
龍泉洞についての資料は数点ありましたが、詳細が書かれている資料として『龍泉洞のあらし』を紹介しました。

資料には、

「山口県の秋芳洞、高知県龍河洞と並んで日本三大鍾乳洞のひとつに上げられている。微生物学、地質学的に貴重な洞窟である。昭和13年12月14日に洞窟とこうもりが名勝天然記念物に指定された。

洞内の長さ2,500mで無数の鍾乳洞、石筍、川、淵が有り、大自然が万年の間、営々と築き上げた悠久の芸術品である。洞内にある鍾乳洞は1cm伸びるのに50年を要するといわれ、石筍にいたっては1cm伸びるのに100年を要するといわれている。」

と、記載がありました。

動植物に関しては5種類のコウモリ(キクガシラコウモリ・コキクガシラコウモリ・ウサギコウモリ・モモジロコウモリ・テングコウモリ)が生息しており、このように一つの洞窟の中に5種類のコウモリが生息しているところは全国的に例がないといわれていること、他にトビムシ、エビ類、カニムシ類、貝類など数十種類の生物昆虫類が生息していることがわかりました。

ヒカリゴケに関するご質問には、植物図鑑を中心に調査しました。『朝日百科植物の世界12』に、以下のような記載がありました。

「洞窟の中で神秘的に光ることで、なにかと話題の多いコケである。ホタルなどが光るのとは異なって、ヒカリゴケは原糸体を構成する球状のレンズ細胞が、外部からの光を反射して光るのである。したがって、光を背にしてヒカリゴケの原糸体を見たときにだけ、黄緑色の淡い光を鑑賞することができる。」

加えてヒカリゴケについて詳しい研究機関を知りたいという依頼もありましたので、調査しましたが、ヒカリゴケ専門の研究機関は探すことはできませんでした。しかし、コケについての情報が入手できる機関は、『コケの手帳』という資料に掲載されていたので、その中の一部をコケ植物研究者のいる博物館として紹介いたしました。

上記の資料3冊と、関係機関として龍泉洞の連絡先、ホームページアドレスもあわせて紹介しました。

【参考文献】 ()内は当館請求記号

『龍泉洞のあらし』 日本洞穴学研究書 || 監修 岩泉町 || 発行 1979年(K455/イ3/1貸出禁止)

『龍泉洞もの知りBOOK』 岩泉町 || 著・発行 1987年(K296.54/イ1/1貸出禁止)

『洞穴の科学』 山内 浩 || 著 日本洞穴学研究書 || 発行 1983年(K455/ヤ2/1イ)

『洞穴学ことはじめ』 吉井 良三 || 著 岩波書店 || 発行 1972年(K296.54/ヨ1/1)

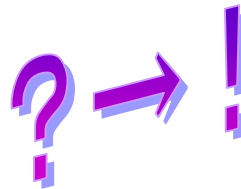
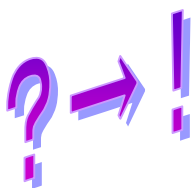
『山と洞穴-学術探検の記録-』 山内 浩 || 著 山内浩著作出版委員会 || 発行 1983年(K454/ヤ1/1ウ)

『日本の秘境』 柞木田 龍善 || 著 読売新聞社 || 発行 1968年(K290.94/タ2/2)

『コケの手帳』 秋山 弘之 || 著 研成社 || 発行 2002年(475/コケ)

『朝日百科植物の世界 12』 読売新聞社 || 発行 1968年(R470/アサ/12)

【龍泉洞ホームページ】 <http://www.town.iwaizumi.iwate.jp/~ryusendo/>



調査・相談カウンターでは、様々な調べもののお手伝いをしています。
仕事や郷土に関する調査・研究など、今回の事例集のように参考文献や関係機関を調査し、回答いたします。
ただし、法令により公表を禁じられているもの、古書・古文書・美術品等の鑑定及び市場価格に関するもの、学習課題・卒業論文・懸賞問題その他これに類するもの、人生相談・医療・健康相談・法律相談・系図調査その他これに類するもの、公序良俗に反するおそれのあるもの等は、岩手県立図書館利用要綱第23第2項により調査の対象としておりませんので、ご了承ください。